看護婦イメージに関する研究（3）

—縦断的研究法と横断的研究法による検討—

和田　佳子，　大石　武信[1)]，　小林ミチ子[2)]，　西脇　洋子

新潟県立看護短期大学，日本大学医学部附属看護専門学校[1)]，新潟大学医学部保健学科[2)]

An Investigation Study of the Image of a Nurse (3)

: A Comparison of the Student's Image of a Nurse using the Longitudinal Method and the Cross-sectional Method

Keiko WADA, Michiko Kobayashi, Yoko Nishiwaki, Takenobu OHISHI

Niigata College of Nursing, Nihon University Nursing College[1)],
School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Niigata University[2)]

Summary The purpose of this study is to investigate the difference of the longitudinal method and the cross-sectional method in the student's image of a nurse. The subjects were 89 nursing students in the longitudinal method and 278 nursing students in the cross-sectional method. The questionnaire investigations were carried out in November, 1998－November, 2000.

The results indicated as follows:

1) Results were similar using both the longitudinal and the cross-sectional study methods.
2) This study reveals a significant increase in the students' positive image of a nurse was seen in the factors of "intelligence" and "occupational attractive".
3) This change depending on the students' experiences in their school curriculum.
4) As the longitudinal method reflects the cohort factors, the method is useful for understanding the characteristics of a grade means.

要　約 この研究の目的は，学生の看護婦イメージの縦断的研究法と横断的研究法による違いを調べることであった．調査対象者は，縦断的研究は 78 名，横断的研究は 278 名の看護学生である．調査は，1998 年 11 月から 2000 年 11 月に行った．

結果から以下のことがいえる．

1）縦断的研究と横断的研究は同様の傾向を示した．
2）看護婦イメージは，"知性" と "職業的魅力" の因子において，ポジティブな方向に変化した．
3）この変化の理由は，学生のカリキュラムに関係があると考えられる．
4）縦断的研究は，コホート要因を反映するので，ある学年の特徴を理解するのに有効であると考えられる．

Key words　イメージ（image）
看護婦（nurse）
看護学生（nursing student）
縦断的研究（longitudinal method）
横断的研究（cross-sectional method）

はじめに

従来，看護婦に対するイメージを測定することにより，その特徴を把握し，理解しようという研究が数多く行われてきた（e.g.，謝花ら，1984；上大迫ら，1993；真鍋，1994；大谷・松浦，1997）．これらの研究の多くは，形容詞対を使用し，因子分析を行い，その特徴を明らかにしようとするものである．そこで抽出された因子は，職業の専門性に関するもの，資質に関するもの，就労状況に関するものが共通しており，これらが看護婦イメージの代表的なものとして考えられる．

しかしこれらの研究は，使用されている質問項目の選定方法が明らかにされていないものや項目対が反対語になっていないもの，分析方法においての不備があるものがあった．

そこで和田ら（1999）は，過去の研究で使用された項目，学生の自由記述による項目を基に，看護婦に対するイメージを測定するための質問紙作成を行った．その結果，48 項目，5因子からなる「看護婦イメージ質問紙」を作成した．抽出された5因子の内容は，“専門的能力”，“人格的特性”，“身体的負担”，“知性”，“職業的魅力”であった．

また，学生を対象にした研究では，学年によるイメージの発達や，実習経験による変化を調べたものも多い．

水野ら（1992）は，看護学生の職業イメージは学年が進むにつれてネガティブに変化することを報告している．そしてその理由として，入学時に持っていた看護婦に対する「天使のようなイメージ」幻想が氷解するためであるとし，同時に現実の職場適応に向けては重要なステップであるとしている．

菅原・今野（1997，1998）は，看護学生の 1 年生を対象に早期臨地体験学習前後の看護婦イメージの変化を調査しており，「やりがい」，「将来性」などに高い評価を与えていた．また，低い評価をしていた「職場環境」が体験後はポジティブな評価に変化したことを報告している．

小林ら（1999）は，和田ら（1999）の作成した質問紙を使用し，学生の学年別の変化を検討した．その結果，学年が進むと看護婦イメージは肯定的イメージが高まること，中でも“知性”，“職業的魅力”の因子に含まれる項目に肯定的変化が多く見られることを報告している．

この評価の方向性の相違は，経験をすることにより，最初抱いていたあいまいなイメージが現実に即したイメージに変容した可能性がある．

発達の研究法としては，その方法論として縦断的研究法と横断的研究法がある．

縦断的研究法では，同一被験者を対象に逐次的に取ったデータを分析・解釈を行うものである．この方法は，発達のプロセスを詳細に検討することができる．しかしその際の時間的・経済的・労力的負担から実際の研究で使用される割合は低い．

一方，横断的研究法は，すでに異なる段階のある被験者から得たデータを分析・解釈するもので，短期間に多量のデータを収集できるメリットのため数多くの研究で使用されている．しかし間接的でコホート要因が反映されないデメリットがある．

例えば，庄次ら（1996）は，平成3年度，平成 7 年度入学の看護学生を対象に看護に対するイメージの比較をした研究を行っている．この中で報告されている結果の中で「大変な」という項目について平成3年度に比べて平成7年度の方が低くなっている．その理由として，平成元年頃の看護婦不足が社会問題として報道・特集されたこと，平成 4 年に「看護婦等の人材確保の促進に関する法律」の成立，「看護の日」制定などによるマスコミ報道の変化を大きく取り上げている．

Dahl（1993）は看護婦および看護のイメージにおいて女性的で医師の従属者という従来のイメージが看護婦の自律的な責任遂行を妨げており，そのために独自の技能と知識を持ってケアを行う専門家のイメージの変革が必要であり，そのイメージの変化により看護専門職の成長と発展が促進されることを述べている．

中島（2000）は，看護婦イメージが変容する理由として，流行のコミックを例に取り上げ，「白衣の天使」的から「看護の職業性」に焦点を当てたことをその理由にしている．この点では，Dahl（1993）の求める方向性の促進に一役買っているものでもあり，コホート要因を表している例だともいえよう．

小林ら（1999）の研究は，横断的研究であり，縦断的研究を行うと異なる側面が明らかになる可能性がある．

学生を対象にした研究では，逐次的にデータを取りやすいこと，データを取る期間が入学から卒業までの数年と短くて済むことから縦断的研究を比較的行いやすいといえる．

そこで本研究では，小林ら（1999）の研究で得た横断的データと今回得た縦断的データとを比較することによって，看護婦イメージが学年によってどのように変化していくのかを縦断的研究と横断的研究の両方を使用してその変化の内容，また研究法による違いを検討することを目的とする．

方法

1）調査対象者

縦断的調査，平成 10 年度入学のN県立看護短期大学生 89 名．

横断的調査，平成 10 年度N県立看護短期大学 1 年生 100 名，2 年生 92 名，3 年生 86 名の計 278 名．

2）調査期間

1998 年 11 月～2000 年 11 月．

3）調査方法

縦断的調査，横断的調査とも各学年次の 11 月に集団調査法により実施した．

4）調査用紙

和田ら（1999）の作成した「看護婦イメージ質問紙」を使用した．この質問紙は，48 項目の形容詞対から成り，イメージ測定は SD 法（semantic differential technique）を用い，7 段階評定尺度法で行った．

5）分析方法

各項目の段階ごとに 1 点から 7 点を配し得点化を行い，1 要因 3 水準の分散分析を行った．また因子ごとの因子得点については和田ら（1999）の調査で得たデータから横断的調査の結果を，今回の調査から得たデータから縦断的調査の結果をそれぞれについて 1 要因 3 水準の分散分析を行った．因子ごとおよび各項目ごとの有意水準は 1％および 5％とした．多重比較は Tukey 法により 5％水準で実施した．統計的分析には統計パッケージ Windows 版 SAS6.12 を使用した．

6）対象の学習背景

調査時は，前期の授業が終了し，後期の授業が始まり 1 ヶ月経過した時期である．

(1)　1 年次

前期の履修科目は，医学概論，解剖生理学，微生物学，社会福祉原理などの専門基礎科目に加え，専門科目の看護学概論・基礎看護技術および演習である（解剖生理学・基礎看護技術演習は後期も継続）．

(2)　2 年次

専門基礎科目は，生化学・栄養学・薬理学・人間発達学・臨床心理学・放射線医学・病態学を履修している．専門科目については，1 年次の後期に基礎看護学が終了し，次いで成人・老年・小児・母性・精神看護学のそれぞれ概論と保健を履修し，各臨床看護学の講義が始まったばかりである．また，初めての 4 週間の基礎実習を 10 月に終了したところである．基礎実習の内容は，2 週間の病院実習（基礎看護学実習Ⅰ），1 週間ずつの保健所実習と小児看護学実習Ⅰである．

(3)　3 年次

専門基礎科目および専門科目の必修科目はほとんど終了しており，専門必修科目で未履修なものは，看護管理学と訪問看護実習のみである．各論臨床実習は，4 月から 10 月まで 14 週間行われた．

結果

1）因子得点の学年別の平均得点と分散分析の結果を算出した（表 1－1，表 1－2）．

(1)　縦断調査

分散分析の結果，“知性”（$F(2,261)=7.46$, $p<.01$），“職業的魅力”（$F(2,262)=19.23$, $p<.01$）の 2 因子に有意な差がみられた．多重比較をおこなったところ，両因子とも 1 年生と 2 年生および 1 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 年生より 2・3 年生のほうに“知性”と“職業的魅力”が高くなった．他の“専門的能力”（$F(2,254)=1.57$），“人格的特性”（$F(2,262)=1.21$），“身体的負担”（$F(2,260)=0.44$）の 3 因子には有意な差はみられなかった．

(2)　横断調査

分散分析の結果，“知性”（$F(2,273)=6.88$, $p<.01$），“職業的魅力”（$F(2,272)=18.17$, $p<.01$）の 2 因子に有意な差がみられた．多重比較をおこなったところ，両因子とも 1 年生と 2 年生および 1 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 年生より 2・3 年生のほうに“知性”と“職業的魅力”が高くなった．他の“専門的能力”（$F(2,257)=2.42$），“人格的特性”（$F(2,274)=0.30$），“身体的負担”（$F(2,272)=2.27$）の 3 因子には有意な差はみられなかった．

表1−1　イメージ因子の学年別平均得点および分散分析結果（横断）

M(SD)

因子名	1年生	2年生	3年生	F	Tukey
専門的能力	66.52(7.46)	68.80(7.34)	66.88(7.25)	2.42 n.s.	1=2=3
人格的特性	43.51(7.20)	43.88(7.00)	44.32(7.12)	0.30 n.s.	1=2=3
身体的負担	40.41(3.85)	41.32(3.29)	40.16(4.41)	2.27 n.s.	1=2=3
知性	38.00(4.61)	40.51(4.73)	40.00(5.59)	6.88 **	1<2, 1<3, 2=3
職業的魅力	28.83(5.06)	32.51(4.76)	32.60(4.89)	18.17 **	1<2, 1<3, 2=3

**p<.01　n.s. p≧.05　　不等号 p<.05　等号 n.s.

表1−2　イメージ因子の学年別平均得点および分散分析結果（縦断）

M(SD)

因子名	1年生	2年生	3年生	F	Tukey
専門的能力	66.56(7.53)	68.00(7.71)	68.66(8.22)	1.57 n.s.	1=2=3
人格的特性	43.82(7.00)	42.70(6.73)	44.22(6.49)	1.21 n.s.	1=2=3
身体的負担	40.35(3.79)	40.83(3.33)	40.48(3.42)	0.44 n.s.	1=2=3
知性	38.07(4.55)	39.92(4.77)	40.80(5.05)	7.46 **	1<2, 1<3, 2=3
職業的魅力	29.15(5.05)	32.20(4.82)	33.55(4.58)	19.23 **	1<2, 1<3, 2=3

**p<.01　n.s. p≧.05　　不等号 p<.05　等号 n.s.

2) イメージ項目の学年別の平均得点と分散分析の結果を算出し(表2)，プロフィールに表した（図1).

(1)“専門的能力”の因子

「判断力のない−判断力のある」(F(2,263)=6.35, p<.01)，「浅い−深い」(F (2,264) =11.79, p<.01)，「向上心のない−向上心のある」(F (2,262) =4.25, p<.05)，「ぐったりした−生き生きした」(F (2,264) =3.13, p<.05) の4項目に有意な差がみられた.

多重比較をおこなったところ，「判断力のない−判断力のある」と「浅い−深い」とは1年生と2年生および1年生と3年生との間に有意な差があり，1年生より2・3年生のほうに肯定的な回答が多い.「向上心のない−向上心のある」は1年生と3年生との間に有意な差があり，1年生より3年生のほうが「向上心のある」と回答するものが多い.「ぐったりした−生き生きした」では1年生と2年生との間に有意な差があり，2年生に「ぐったりした」と回答するものが多い.

他の9項目，「責任感のない−責任感のある」(F (2,264) =0.01)，「価値のない−価値のある」(F (2,264) =0.41)，「気が利かない−気が利く」(F (2,264) =1.66)，「鈍重な−機敏な」(F (2,264) =1.25)，「些細な−重要な」(F(2,264)=0.78)，「感受性のない−感受性のある」(F(2,264)=1.67)，「軽率な−慎重な」(F (2,264) =0.74)，「やりがいのない−やりがいのある」(F (2,264) =0.47)，「頼りない−頼もしい」(F (2,264) =0.55) には有意な差はみられなかった.

(2)“人格的特性”の因子

「不親切な−親切な」(F (2,264) =0.77)，「きつい−やさしい」(F (2,264) =1.40)，「冷たい−温かい」(F (2,264) =0.42)，「思いやりのない−思いやりのある」(F (2,263) =1.15)，「親しみにくい−親しみやすい」(F (2,264) =1.47)，「激しい−穏やかな」(F (2,263) =2.14)，「陰うつな−明朗な」(F (2,264) =0.17)，「意地悪な−お人好しな」(F (2,264) =1.87)，「暗い−明るい」(F (2,264) = 0.01)，「理解のない−理解のある」(F (2,264) = 1.14) の10項目全てに有意な差はみられなかった.

(3)“身体的負担”の因子

「重労働な−軽労働な」(F (2,264) =7.99, p<.01) と「辛い−楽な」(F (2,264) =8.42, p<.01) との2項目に有意な差がみられた.

多重比較をおこなったところ，「重労働な−軽労働な」は1年生と3年生および2年生と3年生との間に有意な差があり，1年生より2・3年生のほうに「軽労働な」と回答がするものが多い.「辛い−楽な」は1年生と2および3年生との間に有意な差があり，1年生より2・3年生のほうが「楽な」と回答するものが多い.

他の7項目，「体力のない−体力のある」(F (2,263) =1.13)，「弱々しい−たくましい」(F

表2　イメージ項目の学年別平均得点および分散分析結果

M(SD)

		項目	1年生	2年生	3年生	F	Tukey
専門的能力	Q13	責任感のない — 責任感のある	6.47(1.16)	6.46(1.23)	6.48(1.10)	0.01 n.s.	1=2=3
	Q3	向上心のない — 向上心のある	5.14(1.06)	5.27(1.26)	5.63(1.12)	4.25 *	1<3, 1=2, 2=3
	Q33	価値のない — 価値のある	4.55(1.18)	4.71(1.25)	4.65(1.09)	0.41 n.s.	1=2=3
	Q40	気が利かない — 気が利く	4.40(1.20)	4.65(1.06)	4.38(1.02)	1.66 n.s.	1=2=3
	Q19	鈍重な — 機敏な	5.85(1.07)	5.97(0.93)	5.73(0.97)	1.25 n.s.	1=2=3
	Q9	些細な — 重要な	4.78(1.40)	4.71(1.32)	4.94(1.16)	0.78 n.s.	1=2=3
	Q7	感受性のない — 感受性のある	4.94(1.07)	5.19(1.13)	5.24(1.24)	1.67 n.s.	1=2=3
	Q8	ぐったりした — 生き生きした	4.33(1.35)	3.85(1.26)	3.99(1.28)	3.13 *	1>2, 1=3, 2=3
	Q23	軽率な — 慎重な	4.76(0.95)	4.90(0.97)	4.92(0.88)	0.74 n.s.	1=2=3
	Q27	判断力のない — 判断力のある	5.25(1.55)	5.88(1.00)	5.72(1.04)	6.35 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q5	やりがいのない — やりがいのある	5.16(1.31)	4.97(1.62)	5.13(1.38)	0.47 n.s.	1=2=3
	Q1	浅い — 深い	5.27(1.22)	5.74(0.95)	6.06(1.02)	11.79 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q35	頼りない — 頼もしい	5.63(1.10)	5.69(1.11)	5.52(1.05)	0.55 n.s.	1=2=3
人格的特性	Q34	不親切な — 親切な	4.57(0.93)	4.40(0.94)	4.49(0.85)	0.77 n.s.	1=2=3
	Q37	きつい — やさしい	4.97(1.55)	4.60(1.54)	4.75(1.36)	1.40 n.s.	1=2=3
	Q31	冷たい — 温かい	5.29(1.13)	5.13(1.18)	5.22(1.14)	0.42 n.s.	1=2=3
	Q20	思いやりのない — 思いやりのある	4.81(1.15)	4.65(1.13)	4.89(0.85)	1.15 n.s.	1=2=3
	Q2	親しみにくい — 親しみやすい	3.45(1.30)	3.34(1.24)	3.64(1.03)	1.47 n.s.	1=2=3
	Q43	激しい — 穏やかな	4.47(1.32)	4.12(1.14)	4.43(1.23)	2.14 n.s.	1=2=3
	Q41	陰鬱な — 明朗な	5.07(0.97)	5.09(0.87)	5.15(0.95)	0.17 n.s.	1=2=3
	Q24	意地悪な — お人好しな	3.04(1.05)	3.06(0.59)	3.26(0.78)	1.87 n.s.	1=2=3
	Q36	暗い — 明るい	4.29(0.97)	4.27(0.96)	4.28(0.84)	0.01 n.s.	1=2=3
	Q26	理解のない — 理解のある	3.85(1.03)	4.03(1.01)	4.06(0.90)	1.14 n.s.	1=2=3
身体的負担	Q4	体力のない — 体力のある	5.99(1.07)	6.01(1.17)	5.78(1.22)	1.13 n.s.	1=2=3
	Q39	弱々しい — たくましい	4.84(0.85)	4.79(0.90)	4.74(0.86)	0.30 n.s.	1=2=3
	Q10	ささやかな — 大変な	5.19(1.03)	5.06(1.13)	5.00(0.92)	0.81 n.s.	1=2=3
	Q48	病弱な — 丈夫な	5.90(0.88)	5.65(1.01)	5.58(0.89)	2.20 n.s.	1=2=3
	Q18	弱い — 強い	4.64(1.03)	4.64(0.83)	4.61(0.89)	0.04 n.s.	1=2=3
	Q44	気が弱い — 気が強い	4.21(1.02)	4.27(0.94)	4.22(0.96)	0.08 n.s.	1=2=3
	Q15	技術のない — 技術のある	6.08(1.07)	6.33(0.77)	6.08(0.77)	2.32 n.s.	1=2=3
	Q11	重労働な — 軽労働な	1.42(0.67)	1.67(0.75)	1.88(0.88)	7.99 **	1<3, 2<3, 1=2
	Q47	辛い — 楽な	1.97(1.09)	2.42(1.09)	2.61(1.03)	8.42 **	1<2, 1<3, 2=3
知性	Q28	愚かな — 賢い	5.34(0.85)	5.57(0.88)	5.51(0.83)	1.81 n.s.	1=2=3
	Q6	頭の悪い — 頭の良い	4.97(1.09)	5.33(1.16)	5.30(1.14)	2.83 n.s.	1=2=3
	Q45	非科学的な — 科学的な	3.79(0.99)	3.93(0.81)	4.31(0.95)	7.81 **	1<3, 2<3, 1=2
	Q38	劣っている — 優れている	5.21(0.99)	5.29(0.91)	5.20(0.96)	0.24 n.s.	1=2=3
	Q17	非学問的な — 学問的な	5.57(0.92)	5.82(0.86)	6.08(0.83)	7.51 **	1<3, 1=2, 2=3
	Q46	怠惰な — 勤勉な	4.15(0.87)	4.63(0.86)	4.65(0.83)	9.86 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q42	知的でない — 知的な	4.18(0.95)	4.42(0.99)	4.30(1.09)	1.21 n.s.	1=2=3
	Q22	非倫理的な — 倫理的な	4.88(0.96)	4.99(0.85)	5.44(0.89)	9.74 **	1<3, 2<3, 1=2
職業的魅力	Q14	ユーモアのない — ユーモアのある	4.49(0.87)	4.75(0.92)	4.85(0.86)	3.92 *	1<3, 1=2, 2=3
	Q16	魅力のない — 魅力のある	5.47(1.11)	5.65(1.07)	5.97(0.99)	4.98 **	1<3, 1=2, 2=3
	Q25	苦しい — 楽しい	2.19(1.29)	3.08(1.11)	3.25(1.27)	18.77 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q29	不自由な — 自由な	3.10(1.23)	3.52(1.01)	3.88(0.97)	11.56 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q32	地位の低い — 地位の高い	3.16(1.09)	3.62(0.96)	3.57(0.81)	6.25 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q30	嫌いな — 好きな	3.70(1.07)	3.79(1.04)	4.03(1.06)	2.33 n.s.	1=2=3
	Q21	低収入な — 高収入な	3.45(1.42)	3.93(1.07)	3.90(0.95)	4.75 **	1<2, 1<3, 2=3
	Q12	貧しい — 豊かな	3.58(1.12)	3.87(0.92)	4.10(0.89)	6.19 **	1<3, 1=2, 2=3

**p<.01　*p<.05　n.s. p≧.05　　不等号 p<.05　等号 n.s.

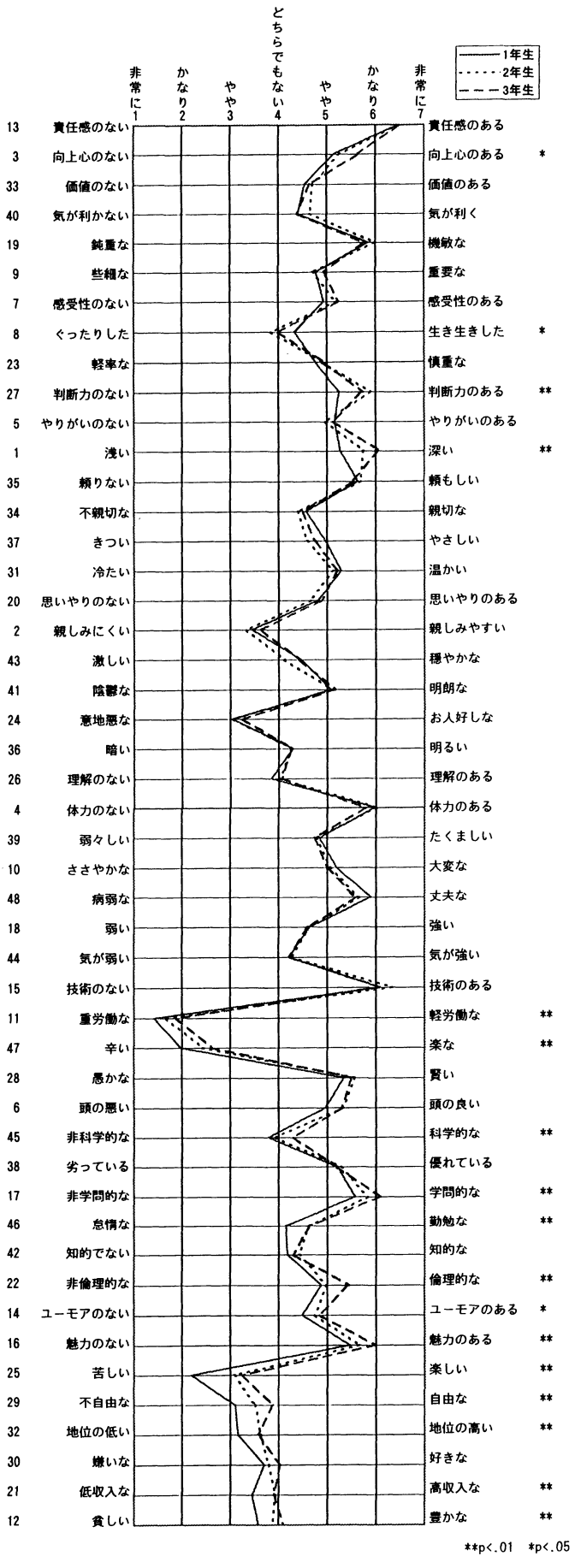

図1　看護婦イメージの学年別プロフィール

(2,264) =0.30)，「ささやかな－大変な」(F (2,264) =0.81)，「病弱な－丈夫な」(F (2,262) =2.20)，「弱い－強い」(F (2,264) =0.04)，「気が弱い－気が強い」(F (2,264) =0.08)，「技術のない－技術のある」(F (2,263) =2.32) には有意な差はみられなかった．

(4) “知性”の因子

「非科学的な－科学的な」(F (2,264) =7.81, p<.01)，「非学問的な－学問的な」(F (2,263) = 7.51, p<.01)，「怠惰な－勤勉な」(F (2,263) = 9.86, p<.01)，「非倫理的な－倫理的な」(F (2,263) =9.74, p<.01)，の 4 項目に有意な差がみられた．

多重比較をおこなったところ，「非科学的な－科学的な」と「非倫理的な－倫理的な」とは 1 年生と 3 年生および 2 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 ・ 2 年生より 3 年生のほうに肯定的な回答が多い．「怠惰な－勤勉な」は 1 年生と 2 年生および 1 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 年生より 2 ・ 3 年生のほうが「勤勉な」と回答するものが多い．「非学問的な－学問的な」では 1 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 年生より 3 年生に「学問的な」と回答するものが多い．

他の 4 項目，「愚かな－賢い」(F (2,264) = 1.81)，「頭の悪い－頭の良い」(F (2,264) =2.83)，「劣っている－優れている」(F (2,264) =0.24)，「知的でない－知的な」(F (2,264) =1.21) には有意な差はみられなかった．

(5) “職業的魅力”の因子

「魅力のない－魅力のある」(F (2,264) =4.98, p<.01)，「苦しい－楽しい」(F (2,263) =18.77, p<.01)，「不自由な－自由な」(F (2,264) =11.56, p<.01)，「地位の低い－地位の高い」(F (2,264) =6.25, p<.01)，「低収入な－高収入な」(F (2,264) =4.75, p<.01)，「貧しい－豊かな」(F (2,264) =6.19, p<.01)，ユーモアのない－ユーモアのある」(F (2,264) =3.92, p<.05) の 7 項目に有意な差がみられた．

多重比較をおこなったところ，「苦しい－楽しい」，「不自由な－自由な」，「地位の低い－地位の高い」，「低収入な－高収入な」の 4 項目は 1 年生と 2 年生および 1 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 年生より 2 ・ 3 年生のほうに肯定的な回答をするものが多い．「魅力のない－魅力のあ

る」,「貧しい－豊かな」,「ユーモアのない－ユーモアのある」の 3 項目は 1 年生と 3 年生との間に有意な差があり，1 年生より 3 年生に肯定的な回答をするものが多い．

有意な差がみられなかったのは,「嫌いな－好きな」(F (2,263) =2.33) のみであった．

考察

学年ごとの看護婦イメージの変化を見ると，“知性”,“職業的魅力”の2つの因子において，1 年生に比較して2・3年生の方がポジティブに変化した．これは，小林ら(1999)で行った横断的調査で得られた結果と同様の傾向である．小林ら（1999）の横断的調査で1年生だった学生を縦断的に3年間追跡し，1学年は集団が重複した影響もあり，同様の結果となったと考えられる．

次に，各因子における項目ごとの変化について述べる．1 年生より 2 年生で肯定的回答が多く見られた項目はなかった．しかし，小林ら（1999）の報告では「愚かな－賢い」,「怠惰な－勤勉な」の 2 項目に見られている．同様に，1 年生より 3 年生で肯定的回答が多く見られたのは,「向上心のない－向上心のある」,「非学問的な－学問的な」,「魅力のない－魅力のある」,「貧しい－豊かな」,「ユーモアのない－ユーモアのある」であった．小林ら（1999）の報告で肯定的回答が多く見られたのは,「感受性のない－感受性のある」,「陰鬱な－明朗な」,「重労働な－軽労働な」,「辛い－楽な」,「非学問的な－学問的な」であり，同様の変化が見られたのは「非学問的な－学問的な」のみであった．1・2年生より 3 年生で肯定的回答が多く見られたのは,「重労働－軽労働」,「非科学的－科学的」,「非倫理的－倫理的」であった．小林ら（1999）の報告では「非倫理的－倫理的」と「ユーモアのない－ユーモアのある」であり，同様の変化が見られたのは「非倫理的－倫理的」のみであった．1 年生より2・3年生で肯定的回答が多く見られたのは,「判断力のない－判断力のある」,「浅い－深い」,「辛い－楽な」,「怠惰な－勤勉な」,「苦しい－楽しい」,「不自由な－自由な」,「地位の低い－地位の高い」,「低収入な－高収入な」であった．小林ら（1999）の報告では「判断力のない－判断力のある」,「苦しい－楽しい」,「不自由な－自由な」,「低収入な－高収入な」,「貧しい－豊かな」であり，4 項目に同様な変化が見られた．また，1・3年生より 2 年生で肯定的回答が見られた項目はなかったが，小林ら（1999）の報告では「鈍重な－機敏な」と「頭の悪い－頭の良い」の 2 項目に見られている．さらに，2 年生より 1 年生で肯定的回答が見られた項目「ぐったりした－生き生きした」があったが，小林ら（1999）の報告では見られなかった．

これらの結果から,「ぐったりした－生き生きした」以外の項目は，縦断的調査および横断的調査ともに、学年進行によりポジティブ方向に変化するが，各項目により，学年変化の型は縦断的調査と横断的調査とでは異なる．

以上のことから，全体的な看護婦イメージを表す5つの因子の中で，“知性”と“職業的魅力”の因子が看護学生の学年による変化を捉えるために有効であることが示唆された．

しかし，水野ら（1992）の報告では看護婦イメージがネガティブに変化しており，今回とは逆の結果である．

この理由として，1 年次の看護婦イメージの評価に大きな差があることが考えられる．水野ら（1992）の 1 年次のイメージは，いわゆる「天使のようなイメージ」で，非常にポジティブな評価であった．それが1年次からの経験を通して現実的な評価へと移行したために，ネガティブな方向へと変化したと考えられる．それに対して本研究や小林ら（1999）の 1 年生のイメージ評価は，全体的にはポジティブではあるが，幻想のように過大な評価をしている訳ではなく，同時に仕事の身体的負担などのネガティブな要因についても認識をしている点が異なる．

この方向性の違いについては，入学時に持っていたイメージが実習を経験することにより，現実の評価へと変化した点では共通していると考えることができよう．

このように看護婦イメージは，実習や講義といった経験により発達するといえる．

その内容をまとめると次のようになる．

看護婦イメージは，実習や講義の経験の浅い 1 年生はマスコミやメディアなどによる漠然としたイメージの側面が強く，そのイメージは 2 年，3 年と年次が上がり実習や講義の経験を積むことにより変化する．

看護婦イメージの方向性は，研究により異なるが，学生が実習や講義などを経験するにつれて，漠然と

したものからより現実的なものへと変化する．

そしてその方向性の違いに関与する要因として，その所属する集団の教育カリキュラムや調査の施行時期による違いが考えられる．

横断的研究と縦断的研究についての違いを考えると，1つには横断的研究には社会的背景が考慮されないことがある．庄次(1996)，中島（2000）が述べている社会問題や看護・医療に関する報道などはそのコホート要因として捉えられる．本研究における結果で因子ごとの変化は横断的調査と縦断的調査とでは同様の変化が認められたが，各因子の下位項目ではいくつか差が認められた．この項目間の差を縦断的調査の集団のコホート要因，つまり特徴といえるのではないかと考える．

高木ら（1997）は，世代により看護婦イメージが異なることの理由を，各世代により社会的役割が異なり，要求することが異なるためであるとしている．しかし，本当に世代間の変化を見るためには，縦断的に数十年間もの間追跡調査をする必要があり，これは極めて負担が大きく縦断的研究のデメリットである．しかし，看護学生の変化を縦断的に調べるためには，数年間だけで済み，縦断的研究のデメリットが少ない．

つまり，全体的な傾向を把握するための横断的研究のみならず，ある学年の個性的な特徴を把握するためには縦断的研究が有効であるといえる．

看護婦イメージの研究は主に教育に役立てる目的で行われてきている．そのため，ある学年の特徴を把握することは重要であり，また，そのことが個々の学生を理解する手助けになると思われる．そのためにも定期的な縦断的調査が有効な手段になるのではないかと考える．

引用文献

Dahl, M, Nurses：An Image Change Still Needed, インターナショナル ナーシング レビュー，16(1)，24-29，1993.

上大迫敏子・石原俊一・中島美代子ほか：看護職イメージに関する研究(1)―看護学生における看護職イメージについて，日本看護学会第24回集録，178～180，1993.

小林ミチ子，和田佳子，福原　紀ほか：看護婦イメージに関する研究(2)－学年別による検討－，新潟県立看護短期大学紀要第5巻，9～16，1999.

真鍋淳子・野尻雅美・中野正孝ほか：看護学生看護婦イメージの研究，看護教育，35(6)，427～433，1994.

水野　智・佐野幸子・若林　満：看護学生の職業イメージ－幻想のイメージを乗り越えて－，エキスパートナース，8(8)，30－33，1992.

村田孝次：第3章Ⅳ発達心理学的研究法，心理学的研究法1方法論，八木　冕編，127～140，1975.

中島憲子：変容する看護婦イメージ－『おたんこナース』より，看護実践の科学，64－65，2000.

大谷和代・松浦妙子：看護学生の入学動機別看護婦イメージ等の経年的変化から探る看護教育の課題，看護展望，22(9)，78～85，1997.

謝花美佐子・平良広子・案里栄子ほか：看護学生の看護婦イメージの学年別による検討―動機と意志の関連性―，看護教育，25(2)，89～94，1984.

庄次由美・小山田信子・渡邊裕美ほか：平成3年度，平成7年度看護学科入学生を対象とした看護にイメージの比較，東北大学医短部紀要5(1)，41～50，1996.

菅原邦子・今野祐子：基礎看護学教育における早期臨地体験学習の効果－看護に対する認識と看護婦のイメージの変化－，天使女子短期大学紀要，18，1997.

菅原邦子・今野祐子：看護学生の早期臨地体験学習前・後の看護婦イメージ，天使女子短期大学紀要，19，1998.

高木恵美子・佐藤友紀・木原信市：世代別にみた看護婦に対するイメージと期待について，日本看護研究学会雑誌，20(3)，1997.

和田佳子，小林ミチ子，井上正美ほか：看護婦イメージに関する研究(1)，新潟県立看護短期大学紀要第5巻，3～7，1999.